

第68回青少年読書感想文コンクール

小学校高学年の部 特選

「同じ空の下で」 賢明学院小6年・上田智尋さん

銃弾の音が鳴りひびく中、うす暗いシェルターの中で7才の女の子は泣く事もなく言った。「これが戦争なのね」。

これはウクライナ侵攻初期の頃、TVで観た映像で、まさに今、身をもって戦争を知りこれまでの平和に気付いたという内容だった。

私にとって戦争はどこか他人事で、もはや平和の意識さえなくなっていた中でこの映像は私の目に焼きついた。

「太陽の子」この本は沖縄出身の両親のもとで育った女の子が、心の病気に苦しむお父さんの病気の原因が戦争にある事に気が付き、お父さんの為に前向きに生きるという話である。私はこれまで当たり前のように沖縄は日本の一部で、広島、長崎と同じく戦争の被害を最も受けた地域として一くくりで考えていた。しかしこの本では沖縄の人々は本州の人達をヤマトと呼び、不公平な沖縄、見殺しにされた沖縄、というように全く別の感覚でとらえている事にまず衝撃を受けた。そしてその孤独感は今もまだ残っているという。私は初め理解が追いつかなかった。沖縄の住民の三人に一人が死亡した事や集団自決があった事など戦争の実態について知らない事の連続だったからだ。又、教科書で戦争の存在を知る事はあっても「戦争を乗り越える」その過程について触れられた事もなく、考えた事もなかった。

主人公のふうちゃんは戦争に苦しむお父さんの為に同じ沖縄出身の仲間と共に「戦争を乗り越え」ようとする。その一歩が戦争を知る事だった。読んでいるうちに私はふうちゃんと共に戦争を知り、考えている気持ちになった。ふうちゃんは私と同じ六年生だけれど芯の強い人だった。何度もつらい目に合うがその度に前を向いて進む。私の頭には、ページをめくる度に心を強くする常に笑顔いっぱいのお父さんが浮かぶ。正に「太陽の子」である。きっと「生きる」という意味をたくさん考えた結果、戦争の出来事を自分の心に活かす事が出来たのだと思う。

先日、AIが昔の白黒写真をカラー化したというニュースを見た。そのうちの一つの原爆の写真に心を打たれた。空が青かったのだ。今まで戦争を習う時、並べられているのは死者数など暗い事実ばかりだった。戦争の期間を暗いイメージにとらえていたばかりに私は勝手に背景を黒色だと思い込んでいた。しかし実際、空は青かったのだ。ふと外を見ると私が生きている今の空も青かった。私は心がふるえた。当時の人にとっても戦争の中のある一日ではなく普段通りの生活が始まろうとする中の出来事だったと気付いたからだ。私達は漠然と今日の幸せが明日も続くと思い込んでいる。でもつながった空の向こうのウクライナでは今も多くの幸せが壊されている。戦争を乗り越えた経験をつないでいく。それが世界唯一の被爆国の日本に住む私達の使命なのだ。（「太陽の子」灰谷健次郎／角川文庫）